

折り紙展示

無料

折り紙で彩る

源氏物語の世界

～千年の時空を超えてよみがえる雅な平安絵巻～

2011年

6月5日(日)～6月29日(水)

(おおた子育てわいわいフェスタのため、6/11・12・13は中止)

9時～21時 エセナおおた 1階展示コーナー



光源氏と源氏をめぐる人々の愛の物語が、美しい折り紙の世界で表現されます。今回は源氏物語全54帖に出てくる登場人物と時代背景をあらわした作品を一挙に展示します。

どうぞお気軽にお立ち寄りください。

『とぞ、本にはべめる』

この一文で長い長い『源氏』は終わる。中世の昔からこの終わり方は尻切れトンボと目されてこれを未完であると判断した読者によって、「山路の露」という続編まで作られた。

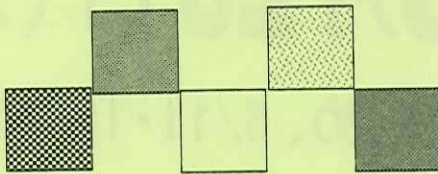
が、男と女は、最後までそれた心のまま、男は最後までサイテーのまま、そんな男のいない世界で、一人の女が、誰にも理解されぬまま生きていこうとするラストはいかにも『源氏』らしいではないか。

だいたい人の一生からして、終わるときは尻切れトンボだ。何もかも帳尻をあわせて、周囲を納得させてから、ハイさよならと逝く人はいない。仕事のことも遺産のことも家のことも、何もかもがやりかけで、中途半端な状態だからこそ、周囲はあわてふためき、悲しむのだ。

『源氏』のラストは、そんな人生の終わり方にも似て、未完的で、無常で、はかない。自分の意志とは関わりなく突如この世に登場させられ、やはり意志とは関わりなく不意に退場させられる人間の哀感を、これほどしみじみ感じさせる物語のラストは、『源氏』をおいてほかに知らない。男女の心のすれ違いということからしても、『人間世界の無常さからしても、この終わり方は革命的だ。』

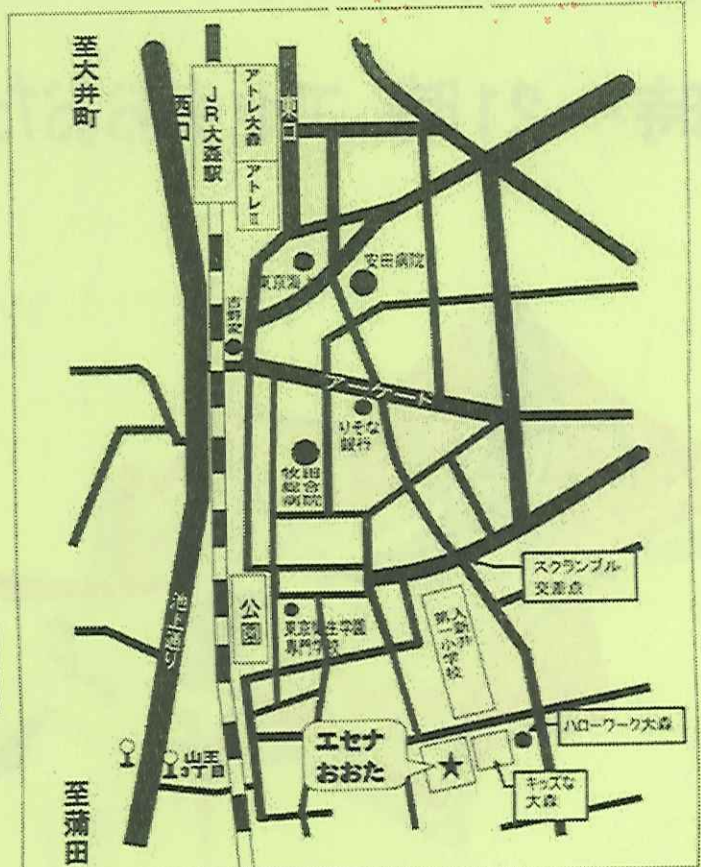
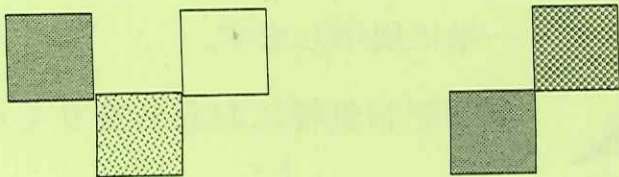
というわけで私は、やはりこのラスト以上に『源氏』的な終わり方は、あるまいと思うのである。

面白いほどよくわかる源氏物語く大塚ひかり 著



主催・問合せ先

〒143-0016 大田区大森北 4-16-4
大田区立男女平等推進センター「エセナおおた」
電話 03-3766-4586
FAX 03-5764-0604
E-Mail escena@escenaota.jp



JR京浜東北線 大森駅より徒歩8分
駐車場はありません。